

文化財NEWS速報

あった!! 三河島の“献上の鶴”



荒川ふるさと
文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(12)0039-02号

写真はかつて搜索願いが出されたことのある鶴です。『あらかわ文化財だより』26、平成9年)。この度、所蔵者伊藤精彦氏(荒川二丁目住)の問い合わせにより現存していることが確認されました。この鶴が初めて世に紹介されたのは、昭和7年。今から79年前のことです。『三河島町郷土史』(入本英太郎編)に、「献上の御鷹図(三河島伊藤安兵衛氏所蔵)」として掲載されました。「鷹」とあります、『鶴』の誤植かと思われます。

絵の作者は村越其栄といい、江戸琳派の鈴木とに学んだ絵師です。其栄は下谷・千住周辺を転々とし、慶応3年(一八六三)7月に、60歳で没しました。したがつて、この絵は幕末に描かれたことになります。

太い青竹にぶら下げられた鶴。鷹狩りの様子を描いた図画によると、鶴は捕獲後、こうした形で青竹に括りつけられ、青竹の両端を担がれ運ばれています(河鍋暁斎『絵本鷹かがみ』など)。しかし、写真のように鶴が単体で描かれるのは珍しく、運ばれる際の鶴の形状をよく知ることができます。所蔵者の伊藤家の御先祖もこれを参考にしたかもしれません。

というのも、伊藤家は将军の鷹狩りが無事遂行されるために獲物を飼育する網差役であつたからです。伊藤家は三河島の植木屋でもあり、その庭園は将军の鷹狩りの際の休息所となっていました。

三河島周辺は鷹狩りの獲物となる鶴の飼付地でした。『献上の御鷹図』はこうした歴史の一端を伝えます。

地名の つぶやき

①日暮里編

〈場面 西日暮里三丁目の諏訪台〉



私は「日暮里」と申します。「日・暮・里」と書いて「につぼり」と読みます。今何歳かと聞かれましても、もうとんと前のことで…。覚えておりまでは小田原の北条様の家臣遠山弥九郎様がこの辺を治めていたころでしょうか、「北条家所領役帳」(永禄2年一五五九)という帳簿に私が「新堀」と出ていますから、450歳くらいにはなつているのでしょうか。どうも、弥九郎様のお屋敷があつて、新しく土塁を築き堀をめぐらしたこと、「こんな名前が付けられた」と(新編武藏風土記稿)。

あつ、いえ、室町時代の文安5年(一四四八)の「熊野神領豊嶋年貢目録」に「につぼり妙凹」ともでできますので、一へみじみとも私も、もう500歳を越えましたか(熊野那智大社文書)第一米良文書)。

長年生きていますと、辛いこともあります。先年少々シヨックなことを耳にしました。中国からの留学生の言葉です。「日暮」という字は、太陽が沈むという意味を持つあまり縁起のよい字ではない。なぜそのような字を地名に使っているのか? 何しろ六千年の歴史のある、漢字の本家本元からこられた方の言葉ですから。中国ではそう

よ。日暮里といえば谷中に続く西日暮里三丁目の寺町、つまり私の「顔」ですが、ここへんに私の名前の由来があるんじゃないかと思つてるんです。

私が生まれていなかろの話になりませんが、奈良時代の歴史を綴つた「続日本紀」という本なんか見てましても、ね、「好き字を着けよ」(和銅6年(七一三))5月2日条、「風土記」の編集の命令)とあって、当時の上は地名には良い意味の漢字をあてよ、なんて命令を出しているんですよ。ですから決して縁起が悪い字ではないと思うんですよ。あの日光の陽明門だって「日暮しの門」ついわれているじゃないですか。日の暮れるのも忘れて見とれるような美しい門という意味ですよ。

えつ、いつごろから「日暮里」の字をあてるようになつたかですか? うーん記憶をたどると、どうも江戸時代の中頃だったような気がします。最初は「あだな」みたいなもので、「日暮しの里」なんて呼ばれていました。自分で言うのも何ですが、私の「顔」であるところの「西日暮里三丁目は季節ごとにおりおりの表情を持つといわれ、雪月花を楽しむ見物人が押し寄せて来て、私も思わず頬を赤らめたものでした。

諏訪台の西側に妙隆寺(西日暮里三丁目一〇八〇番地付近近代に修性院と合併)というお寺さんがありましてね、境内にサクラやツツジを植え、見事な庭を作り上げました。元祖「花見寺」です。ここが評判となり、近所のお寺さんも競つて庭をしつらえるようになりましてね、日暮里の山が一つの庭園の

ようでしたよ。文学(漢詩)好きでグループの大工柏木如亭さんとか、お役人でありながら、狂歌・洒落本などに手を染めている太田南畠さんなんかが、度々足を運んでくださつて、ほうぼうで宣伝してくれたもんです。そのころでしよう。「につぼり」の音に「日・暮・里」をあて、だれともなく「日暮しの里」と呼ぶよくなつたのは。

正式に

はどのようないかつて? 私にも、よくわかりませんよ。江戸時代の公とされる文書や記録では「新堀」の字を使つていますがね。もつとも、私の頭から爪先まで全身をさして、いる時に限られるようでしたね。

上野戦争の時は、山統きだつたこともあって官軍に私も相当痛め付けられました。明治時代を迎、どうやら正式な「新堀村」という名前を頂戴して落ち着いたなアと思つたら、また騒ぎが始まつた。何でもそのころ使われた地方行政区画の大区小区制(舌が回らんよ)とやらのうち、第五大区十四小区というところにいれられたんだが、江戸川の新堀さんもここに入つていて、郵便の誤配統き。あちらは「しんぼり」だつていうのにね。そんなこんなで、明治10年(一八七七)内務省というお役所にお願いして「日暮里」にかえてもらつたわけ。

まあ、結局、けつこう「日暮里」の名前が気に入つて、明治10年(一八七七)内務省というお役所にお願いして「日暮里」にかえてもらつたわけ。

まあ、結局、けつこう「日暮里」の名前が気に入つて、明治10年(一八七七)内務省というお役所にお願いして「日暮里」にかえてもらつたわけ。

(野尻かおる)

文化館のためいき①

▼ 地球にやさしいは
博物館に厳しい▲

今日は12月28日。世間一般では仕事を納めである。しかし、荒川ふるさと文化館の収蔵庫は休むことはない。荒川区の歴史・文化の財産とも言うべき資料が眠つて、365日24時間体制で温・湿度を保つべく空調機器が作動してしているのである。そして今年最後の締め括りとしてこの収蔵庫の消毒作業、いわゆるくん蒸作業が待つていた。当館では年1回、くん蒸作業を行つて、いつも住み良い環境であるのだ。

資料保存を第一に考えるのは言うまでもないが、一方で、博物館では資料を展示・公開する役目がある。展示される資料はいわば無菌室の状態である。その間に、資料が外気を漂うカビやシミ等の害虫にさらされる可能性がある。展示が終了すれば再び収蔵庫にしまわれるのだが、その際に資料に付着した害虫・菌が収蔵庫に侵入するのである。ましてや、資料を扱う人ですら害虫・菌を運んでしまう場合もありえなくもない。

前置きが長くなつてしまつたが、これらの被害を食い止めるために、当館だけではなく一般の博物館でも行われているのがくん蒸なのだ。

文化館繁昌記①

あらかわの近現代ってなんだ!?

「あらかわは東京にある」：始めから当然のことでの恐縮なのが、これが殊の外、あらかわの近現代史、また、近代化を考える上で重要なである。

一口に「近代化」といっても、均等に変化していくわけではない。その時々の事象—政治や天変地異、戦争など—によって左右され、その地域がどこにあつたのかによつても変わる。当あらかわにおいては、「東京」にあつて、それが首都であつたこと、しかし当初は市街地ではなく郡部であつたことが大きい。

なぜ、突然このようなことを書くかというと、先日考えさせられる出来事談にいらした。「おじいさんやおばあさんが子どものころ」（40～50年前）や『お父さんやお母さんが子どものころ』（30～20年前位）に使つていた道具の写真を載せたいのだが、適当な写真はないか」ということだった。

「ランプ」や「かまど」などをはじめとする道具を使用したり、子供たちは山に薪をとりにいったり、夜の仕事をして藁で筵を編むことをした、というのが先生の考える「おじいさんやおばあさんが子どものころ」のあらかわの生活であった。

読者の皆さんはこれを読んでどんな生活を想像されるだろうか？筆者は、「農家？」と思った。だが、年代は40～

50年前という。すると矛盾する。あらかわは昭和初期には、農業はほぼ姿を消しているからだ。

これは、日本における近現代の「典型的な農村」の生活なのかもしれない。だが、「典型的な農村」とはどんな農村なのか。自然にあふれ自給自足ともいえる生活を営む地域だろうか。当然だが、その地域によって様相は異なり、各々特徴がある。普遍的な部分があるにせよ、一括りに論ずることはできない。あらかわにおいては、「東京にある」ことがポイントとなり、「典型的な農村」の型にあってはまらない。

では、あらかわの近現代とはどんな様相であったのだろうか。誤解を恐れずにあらかわの近代化の過程を簡単に述べると、近郊農村的色彩が濃かつたあらかわは、官営の千住製糸所などが設立したのを皮切りに南千住から工業化し、交通網の発達、日清・日露戦争、関東大震災などを契機にさらにマチ化していく、ということであろう。

現在のあらかわにあたる部分は、明治5年（一八七二）までにすべてが東京府下に、明治11年に東京府北豊島郡、昭和7年（一九三二）に荒川区となり、東京市に編入された。

当初、市街地の近郊にあつたあらかわは、地価が安く、また水上交通の利便性にとむなど、様々な条件がそろい、工場や町工場などが進出しやすかつた。特に、川沿いには先の千住製糸所、尾久の煉瓦工場を始めとして沢山の工場が設立された。また、工業の発達など様々な要因で、人口はの増加は、徐々に近郊地域である郡部にも広がる。もちろん、あらかわも例外でない。東京

の中心部へ物資を運ぶため、また、人々の足としての交通網も発展し、さらに人口が増加する。産業構造の変化、人口、交通など各々が相互に密接な関連性を持ち、農村風景は徐々に消え、工場、町工場のマチへと変化していく。

ところで、40～50年前を設定しているということは、昭和25年～35年頃になる。昭和31年になつて「もはや戦後ではない」といわれた位なのであるから、戦後の復興期であつたことを考慮しなければならない。前述したよう

な、近代化したあらかわの様相のみを見たのは不十分である。

戦争は人々の生活を変えていく。物資が不足し生活必需品は配給制になつた。子供たちは、親元を離れ疎開を余儀なくされた。また、昭和17年の東京初空襲以来、あらかわは終戦まで幾度となく空襲を受けた。戦争は、戦中はもちろんのこと戦後のあらかわの人々の生活にも影響を与えた。

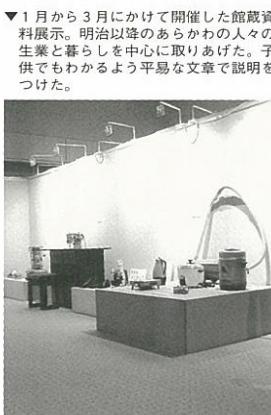
それぞれの地域にはそれぞれの歴史があり、画一的な歴史はありえないことが理解できよう。このことを常に念頭において、「あらかわ」の近現代を見え、そして伝えていく術を考える必要がある。

では具体的にくん蒸の方法や薬品について紹介しよう。実はこれがこれから課題になつたのだ。

当館で行われているくん蒸方法は、薬品を気化させて収蔵庫に送り込み、暖かい時期であれば24時間、寒い時期であれば48時間中ずつと一定の濃度を保ち殺虫・殺菌を行うもので、一般的に密閉くん蒸と呼ばれる方法を取っている。できればこれらの年1回のくん蒸だけではなく、資料を収蔵庫に収める前にくん蒸しができれば資料保存上望ましいのだが……。

では、くん蒸作業に使われている薬品というと、当館では通称エキボンと呼ばれる物で臭化メチルと酸化エチレンを混合した薬品を使用している。殺虫・殺菌の両方が可能であり、かつ非常に浸透性が強く、木や紙、衣類等に浸透して、中に潜む虫やカビの菌などを殺すことができる。また、一般では不可能な虫の卵を殺すこともできるのでこの作業を行う上では欠かすことのできない薬品なのである。だが、エキボンの主成分臭化メチルがオゾン層を破壊するということで国連環境計画において二〇〇五年以降は全廃となり使用出来なくなることが一九九七年に決定された。

そこでこれから課題に結びつくのがエキボンの代用品ということになる。だが、現在、エキボンの代用品として使用できる薬品は完成されていない。この話はくん蒸の話に留まるだけでなく、「これから」の資料保存方法をどのように行うか」という話しに発展している。



（加藤陽子）

▼1月から3月にかけて開催した館蔵資料展示。明治以降のあらかわの人々の生業と暮らしを中心に取りあげた。子供でもわかるよう平易な文章で説明をつけた。

専門員は見た!②

試掘・人骨・火葬場の歴史像

平成12年8月10日、

南千住警察署から一本の電話が入った。南千住五丁目のある工事現場などで人骨が出土した場合、事件性の有無を確かにするため、まず警察署へ届け出ることになっている。この骨には事件性がないということで、当館に連絡が来たわけだ。そこで、埋蔵文化財担当の事務職員と専門員が現場に直行した。当該地は、南千住五丁目の一角。近世の火葬場があった場所として、あらかじめ地域社会に遺跡として知られている土地。周知の埋蔵文化財包蔵地である(詳しくは、『埋蔵文化財保護の手引き』を参照)。近世の絵図などによれば、火葬寺の一つ、乗蓮寺(法華宗)のあつた地点だった。さっそく試掘調査のための調整がなされ、15・16日荒川区教育委員会による試掘調査が、都の立ち合いのもと実施された。工事によつて掘り起こされる地層はすでに搅乱されており、調査は「一日で終了となつたが、いくつかの遺物が出土した。夏の暑いさなか、細々した白い粉が混ざった土をひたすら掘つた。白い粉は火葬骨である、と後で教えられた。試掘調査では、何も出ない場合もあるが、文字資料担当の私には、「形あるもの」さえ出土すれば喜びであつた(それが骨でも)。実際、先の火葬骨のほか未火葬の人骨、古銭やキセルの吸い口、あるいは、徳利や土製の人形なども出た。火葬寺があつた場所という



ことで、火葬骨、徳利(骨壺の代用品)の出土は理解できたが、その地を総合して理解しようすると、古銭は六道銭、鉄製の吸い口はその代用品、土製の人形は副葬品ということになるまい。あるいは徳利も埋葬品なのかもしない。もとより、攪乱層なのでどこまでさかのぼれるのか想像も付かないが、出土品は考古資料によればここには埋葬施設があつた可能性が高まる。だがこれはこれまで私が持つていた、近世の火葬場=火葬施設なるイメージと著しく相反した。かくて、それは簡単に崩れ去つて、またただ単純にそう認識してきたことに気付いた。

『荒川区史』をはじめ、近世の火葬場に触れる文献は存在する。これらは文字資料によって書かれているのだが、概ね現代の斎場に帰着するような、どうやら私はこうした文脈を無批判に受け入れてきたようだ。だがひるがえり、仮にそうだとしたら、先の出土品の存在はどのように位置付けられるのだろうか。

第一八卷、四八七~四八八頁

文政13年(一八三〇)の夏から秋にかけて「石塔磨」なる怪現象が江戸を騒がせたという。石塔がいつのまにか磨かれ洗われて、他と見比べて綺麗になつている現象である。これが発見され、風聞にのぼつた。元平戸藩主松浦静山や戯作者滝沢馬琴などは、その風聞を記録しているが、右の史料はこの現象が実際にあつたことを示す点で貴重である。さてこれによれば、時刻は定かではないが夜中に、安楽院の檀家の石碑4本が磨かれていたらしい。

「石塔磨」は、石塔・石碑を前提とする現象だから、この点に偽はない。さらに石碑は檀家のものであり、年号や家名・戒名などが磨かれているところ。となると、この石碑とは墓石である。つまり、安楽院には檀家がいて、小規模ながら墓石の建つ墓域が存在していたのである。また、清光院(曹洞宗)、

の出土は理解できたが、その地を総合して理解しようとすると、古銭は六道銭、鉄製の吸い口はその代用品、土製の人形は副葬品ということになるまい。あるいは徳利も埋葬品なのかもしない。もとより、攪乱層なのでどこまでさかのぼれるのか想像も付かないが、出土品は考古資料によればここには埋葬施設があつた可能性が高まる。

だがこれはこれまで私が持つていた、近世の火葬場=火葬施設なるイメージと著しく相反した。かくて、それは簡単に崩れ去つて、またただ単純にそう認識してきたことに気付いた。

『浅草寺日記』には、これの関係記事が若干だが所収されており、先日、次の資料を見出した。

『浅草寺日記』には、これの関係記事が若干だが所収されており、先日、次の資料を見出した。

文字資料の検討をもとに、ようやく先の出土品の理解に近付けた。試みに事例を敷衍すると、出土品はこうした檀家の埋葬品である可能性が高い。どうやら、火葬寺にも埋葬施設があつたらしい。近世の火葬場を理解するには「寺」という字に注目する必要がありそうだ。とはいゝ反省すれば、えてして自分の認識を安定させるため、「歴史的に」という言葉で正統化して、考えもせずそれに則つた歴史像を描きがちだつたように思う。火葬場の場合、近世の火葬場を単に火葬施設とするこにより、安心していただようだ。今回発見した両資料は、安心を得るよりも、新たな資料の発見によつて歴史像を再検討する柔軟な姿勢を求めているような気がする。とはいゝものの、江戸の火葬場については、依然として不明な領域が広く、現状は糸口をみつけた程度でしかない。調査は今後も続く個人的には警察からの電話を待ちつつ……。

〈亀川泰昭〉

荒川区指定無形文化財(鍛金・昭和62年指定)保持者・桶谷清作氏(85歳、西日暮里)は、去る12月23日に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

訃報

荒川区指定無形文化財(鍛金・昭和62年指定)保持者・桶谷清作氏(85歳、西日暮里)は、去る12月23日に逝去されました。